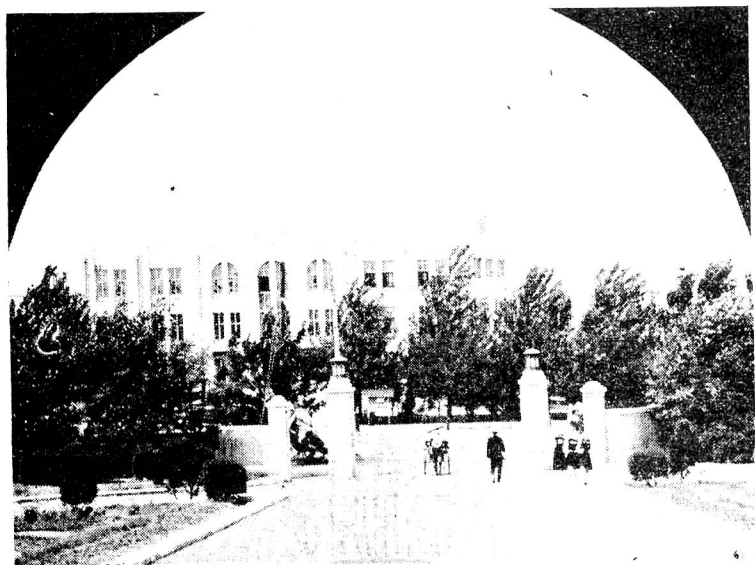


重工業撫順



順撫工業重

著 勝 常 地 濱



輯 八 十 五 第 書 叢 會 員 社

昭和十七年十二月十日印刷
昭和十七年十二月十五日發行

〔頒價〕 金八拾錢

著 作 人 新 京 特 別 市 白 菊 町 四 丁 目 二 番 地 ノ 一
濱 地 常 勝

發 行 人 大 連 市 初 音 町 三 五 三 番 地
河 瀬 梯 二 郎

印 刷 人 大 連 市 近 江 町 九 一 番 地
山 田 浩 通

印 刷 所 大 連 市 近 江 町 九 一 番 地
東 亞 印 刷 株 式 會 社

大連市東公園町・滿鐵本社內

發 行 所 滿 鐵 社 員 會

滿鐵社員會叢書
• 第五十八輯 •

順撫工業

序

近年我が國勢の急速なる進展に伴ひ、イデオロギーのみで事業を起し、基本調査に科學性を缺き、經營に練達の士を求めざるために失敗に歸した國策事業が餘りにも多い。私は是等事業の責任者を非難したくはない、我が國民の民度の未だ一般に低位なるを悲しむものである。

事業は常に石橋を叩いて渡れと謂ふのではない。何事にも不確實性は免れない、偶然性は常に隨伴する。併し可能なる合理的手段は盡さねばならない。其の上で必成の信念を以て邁進する。これが事業の心髓である。これが所謂盡人事待天命のである。

國家の急激なる要望には多くの失敗も亦不得已と辯解するは、即ち思辨の淺薄なるを告白し、用意の不充分を曝露するに過ぎないものである。畢竟、生産事業に對する國民の年季が足りないといふに盡きると言はざるを得ない。

撫順の事業には一つとして失敗がない。併し今日より見て、あゝやつたら更に一層良かつたといふ問題は

決して勘くない。併しこれは慾といふものであらう。撫順の仕事がすべて一應の成功を告げたのは基礎が深い、年季が入つてゐる、板に付いてゐるといふに盡きる。強心臓やバテレンが存在せずといふことである。

撫順に不成功の事業がないとて誇るに足るものでない。これが常道である。否、更に深く考ふる時は、撫順と雖も西洋人をアツと言はせる程の創造は出来てゐない。頁岩製油はモン下の技術に習つたものである。

石炭液化は難儀ではあつたが、是とてもベルギウスを追跡したものである。撫順は滿洲の科學技術の先達として眞の創造を産まなければならん。

濱地君の書いた撫順の發達史と現状は、世の事業を爲す者にとつて好箇の參考資料である。私は濱地君の努力に感謝するものである。

昭和十七年八月

久保 孚

自序

昨年十二月八日米英に對する宣戰布告以來、日本國民は未曾有の大業たる長期大東亞共榮圈經營に當面することになつた。この興亞的な政治的新秩序新體制の大成といふ事業は、一面には大陸及び南洋に於ける支那民族の對日意識の轉換を誘導すると共に、他面には、英米が一世紀に互つて築いた所の東亞の諸權益を打破し、東亞民族の共同による新東亞への編成替へを完成することである。

この東亞共榮圈の確立は大東亞戰に劣らざる多難、且つ長期の國民總體力を傾注せねばならない。然も、この工作は兵戰と平行的に進めねばならず、又全く東亞自力で遂行せねばならない。

大東亞共榮圈は日本の指導の下に、日滿支三國が中核體を爲し、其の經濟産業開發を基礎として確立せらるべきものであり、従つて日滿支産業五ヶ年計畫が其の根幹を爲すものである。

この日滿支産業開發計畫中に占むる滿洲部門の役割は極めて重大なるものであるが、又その一部を爲す撫順炭礦重工業部門の占むる位置も大なるものがある。こゝに於て、計畫經濟より見て東亞共榮圈に於ける撫

順炭礦の役割は早晚正當に決定せらるべきものと思はれる。

本書はその参考の一端として、又撫順炭礦の事情紹介の意味も含め、久保前炭礦長を始め、炭礦の専門家により編纂された昭和十四年度版『炭礦讀本』を改編増補して作成したものである。

滿鐵の重工業への貢獻は滿鐵直營の撫順炭礦を通じてのみではなく、創立以來或は直營的に、或は資金的助成により、或は鐵道運賃政策によつて行はれて來たのであるが、滿洲國成立以來漸次直營的な部門は他に移管され、今日に於ては直營的滿鐵の重工業部門としてはたゞ撫順炭礦のみを残すに過ぎない。

廣い意味に於ける滿鐵の重工業部門としては、現在でもこの直營の撫順炭礦のみではなく、滿鐵子會社としての本社直轄にある礦工部門の關係會社が十數社あるのであるが、本書は本社監理の礦工部門の關係會社に就いては之を割愛し、滿鐵直營の重工業部門たる撫順炭礦に就いてのみ編纂したものである。

撫順炭礦の事業は本稿によつても明らかな様に極めて多種多様に互るため、炭礦の全般に亙つて一通りの知識を得ることは、分業の組織下に働く炭礦従事員には非常に困難なことである。それで炭礦従事員にまつた知識を得させる意味で昭和十二年『炭礦讀本』が編纂され、之を従事員の教材としてゐたのであるが

この『炭礦讀本』は又、世間からも重工業の参考書として重寶がられて來たのである。然るに昭和十四年度改版以來、防諜の關係から社外一般には配布不能となつたので、之が一般的なものに編纂換へが要望されるに至つた。そこで昨年末より社外發表可能な形式に編纂換へを行ひ、編纂の重點を撫順地區に置き、東亞に於ける採炭を中心とする綜合經營の最大形態の實例として、東亞産業開發機構の参考にも資せんとしたものである。

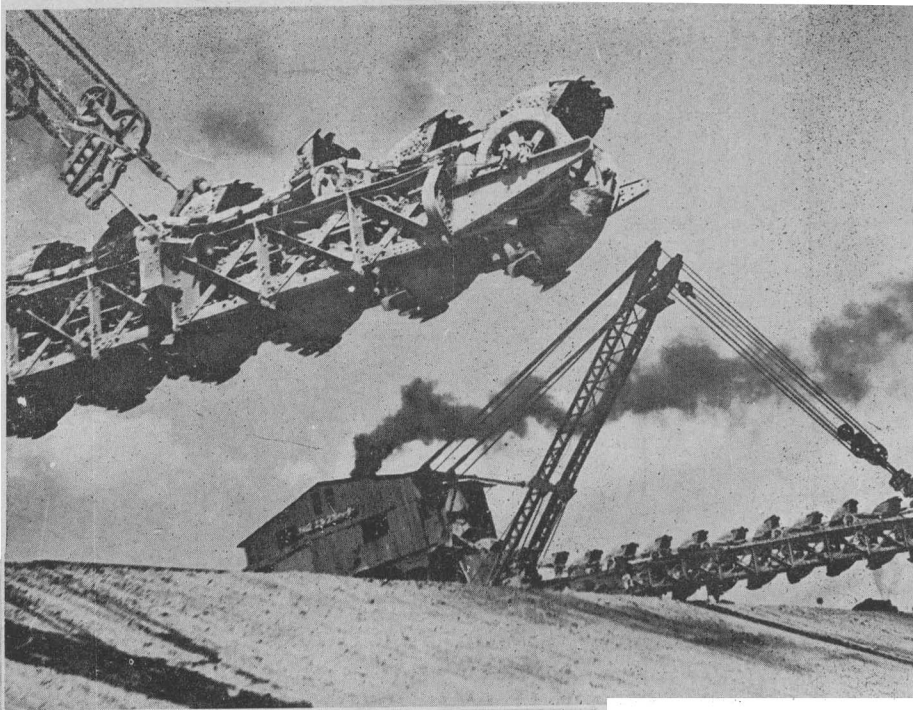
本書の第一篇に於ては歴史を述べ、歴史年表を附し、之により滿鐵の成立と撫順炭礦の採炭を中心とする綜合經營發展過程を示し、炭礦の各事業が必然的な發生より有機的な綜合關聯にあることと、之等を完成せる技術が漸次育成され、然も相互に協同して今日の發達に導いた事を明らかにした。第二篇に於ては撫順炭礦の有する地下資源につき概説した。この資源の上に永き歴史を有したればこそ技術の進歩が出來、今日の綜合經營が營まれ得たものであり、將來も撫順の如何なる事業と雖もこの資源と離れて個々には成立し得ないことを本編より知つて頂きたいのである。第三篇に於ては現在の撫順の事業各個に就いて述べたものである。この編からは各事業相互の關聯が判明し、又技術の程度が推定される。尙事業の設備、大きさが禁止

事項で記載出来ないことは残念である。最後の第四篇人事勞務篇に於ては、撫順炭礦の經費の主要部分を占め生産の基礎を爲す日滿従事員の實竝に量について概略を述べたものである。

本編纂を終つて、撫順炭礦の發展の歴史を顧る時、撫順綜合經營の發展過程は極めて自然的であり、少しの無理もないことを痛切に感じる。然らば撫順の將來は如何と謂ふと、之は資源の量と質とによつて自ら決定されるものと思ふ。本地區に於ける採炭・發電は、量的には既に發展の餘地少きものと思はれ、技術的な進歩のみが残されてゐる。その他の事業は量的にも質的にも發展の分野は廣く、特に化學工業方面に於て未開の大なる發展分野が残されてゐるものと思はれる。この將來の發展を、はたして滿鐵に於て單獨に賄ひ得るかと考へる時、そこに一抹の不安を感じるほど發展分野は大であると思はれる。

昭和十七年八月

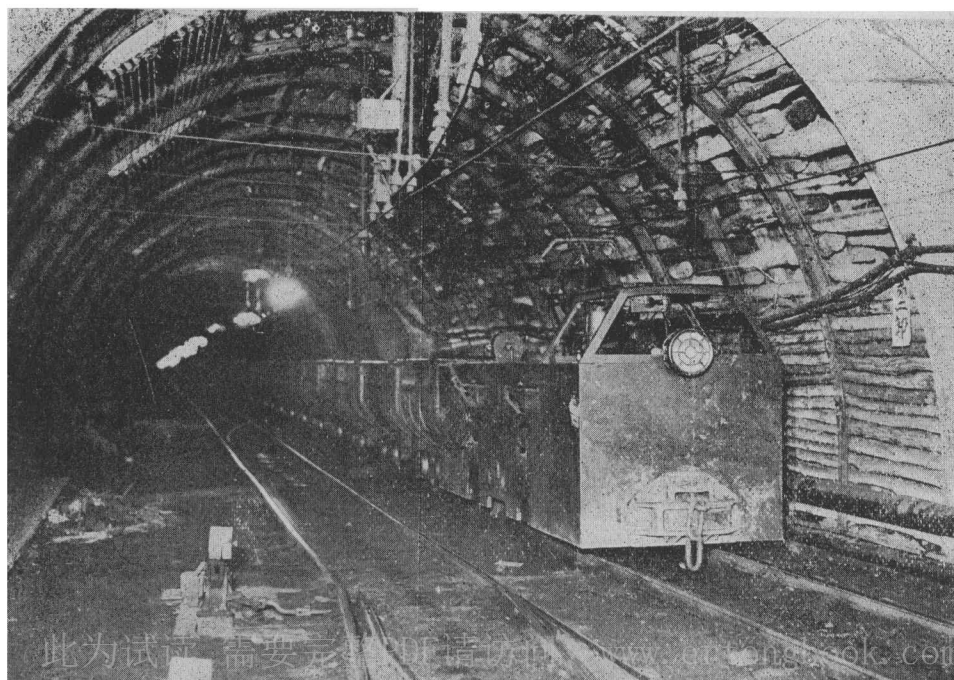
濱 地 常 勝

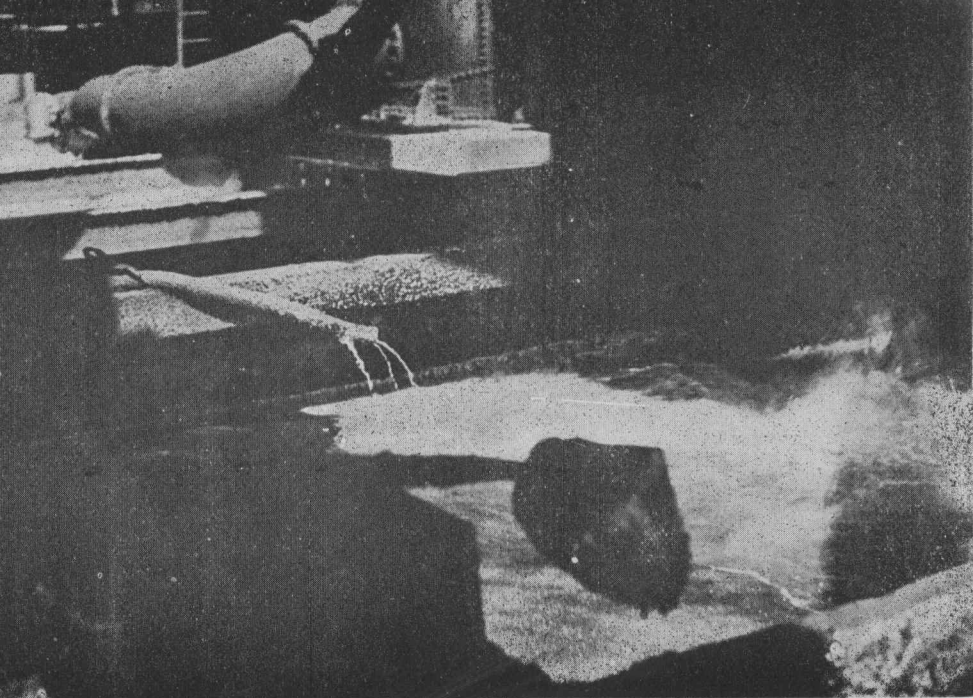


露天掘



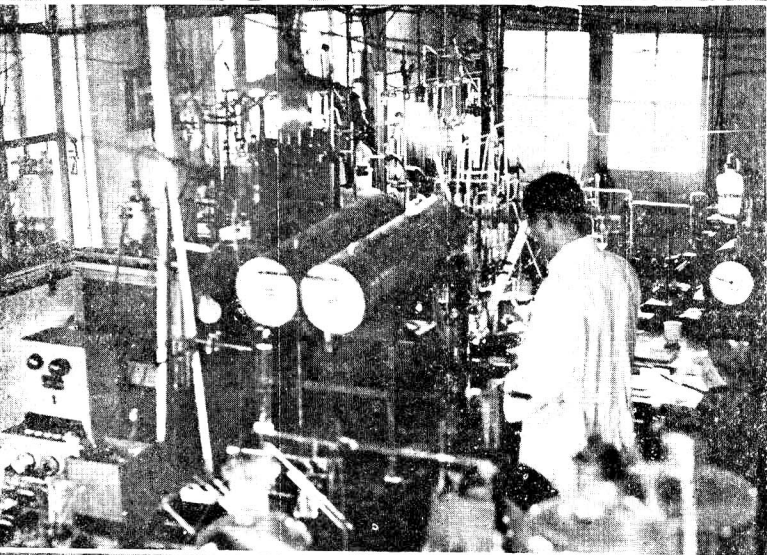
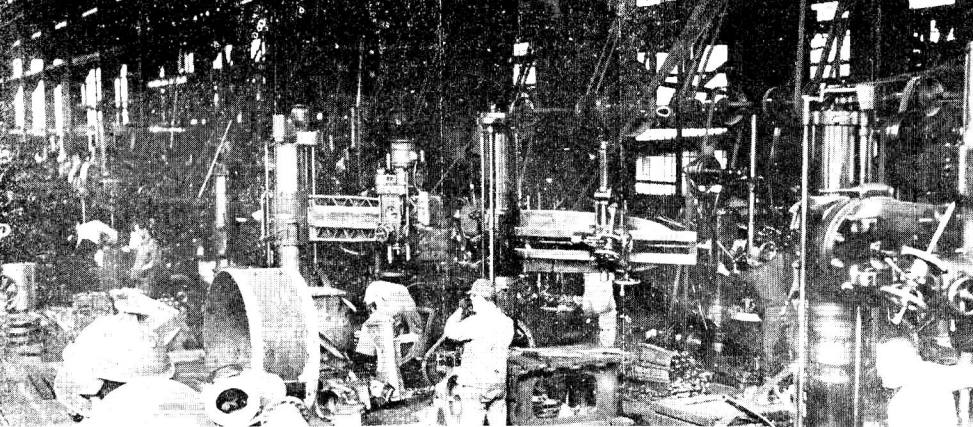
坑 內 掘



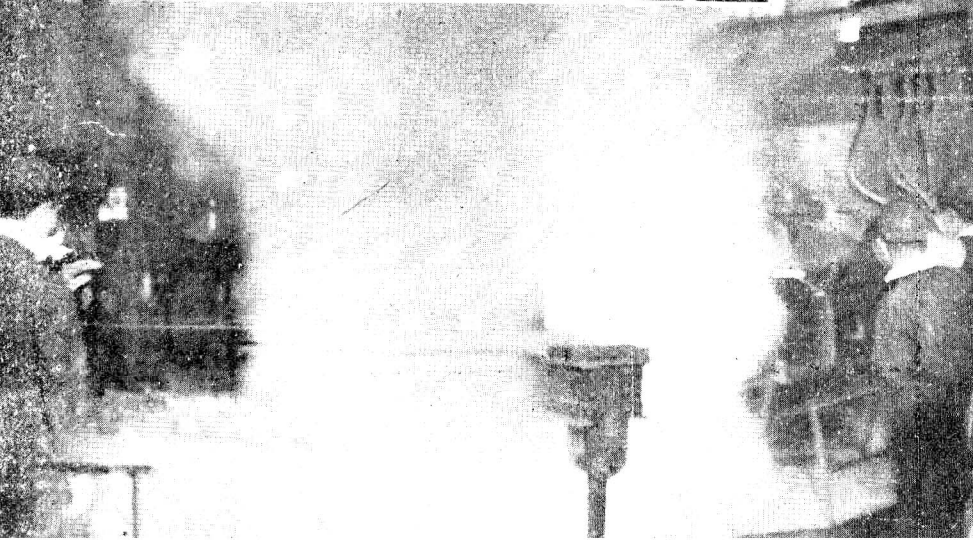


オイルセール工場





(上) 機械工場
(中) 研究所
(下) 電気爐



目次

第一篇 撫順炭礦の歴史

第一章 日露戦争と滿鐵の創立……………(一)

第二章 撫順炭礦の條約上の地位……………(五)

第三章 撫順炭礦の歴史……………(七)

第四章 外地諸炭礦の歴史……………(一〇)

第一節 煙臺採炭所……………(一〇)

第二節 蛟河採炭所……………(一一)

第三節 老頭溝採炭所……………(一三)

第四節 瓦房店坑……………(一四)

第五章 撫順炭礦沿革一覽表……………(一四)

第二篇 撫順炭礦の地下資源

第一章 撫順の炭田……………(一七)

第二章 撫順の炭量……………(元)

第三章 撫順炭の性質……………(二四)

第四章 撫順炭の用途……………(元)

第五章 油母頁岩……………(三)

第六章 油母頁岩油の性質……………(三)

第七章 外地炭田……………(五)

第一節 煙臺炭田……………(五)

第二節 蛟河炭田……………(五)

第三節 老頭溝炭田……………(七)

第四節 瓦房店炭礦……………(元)

第三篇 事業篇

第一章 採炭の話……………(元)

第一節 撫順の採炭……………(元)

第二節 坑内の採炭……………(四)

第三節 露天掘の採炭……………(五)

第二章 工務の話……………(九)

第一節 工務の概説……………(九)

第二節 機械製作所……………(十)

第三節 發電所……………(十一)

第四節 工事事務所……………(十二)

第五節 運輸事務所……………(十三)

第三章 工業の話……………(九)

第一節 概説……………(九)

第二節 化學工業所……………(十)

第三節 火藥製造所……………(十一)

第四節 油母頁岩工業……………(十二)

第五節 石炭液化工業……………(十三)

第六節 製鐵工場……………(十四)

第七節 研究機關……………(十五)

第四篇 人事勞務篇

第一章 概説……………(一四)

第二章
第三章

人事關係
勞務關係

(日本人)
從其員
滿吏人
勞働者

..... (一覽)
..... (一覽)